## テーマ❽ 介護過程をより広く深く考える

日本生活支援学会会長
**黒澤 貞夫 氏**

**── 介護過程についてお聞かせください。まずはその意義と目的は何ですか？**

介護過程というのは介護福祉士の専門性が実践的な核となる大事な分野です。

まずは介護過程の意義と目的について考えてみます。「いい介護をしますよ。あなたの気持ちをよくわかるようにします」というような介護の方針があるわけですが、それを具体的に示さないと意味がありません。つまりよい介護をするということ。あなたの気持ちをよく尊重しながら介護をすることを計画で示さないとよく理解されません。それが一つです。

二つには、国家というものは国民の生活の権利を守るために制度・政策を考えて、法律による枠組みをつくるわけです。その枠組みにワインを入れなくてはならない。革袋をつくるのは政府の制度・政策。そしてワインを注ぎ込むのは実践なんです。つまり両方が相まっていかなければなりません。

革袋を政府がつくってくれたわけですが、どういうふうにワインを入れるのか。これは聖書の教えになるのですが、それが介護過程なのです。

具体的に言いますと、まずは政府が制度・政策を策定するために行うのが生活の保障です。生活の保障によって政府は尊厳が保持されて、能力においては自立を促進すると。そして保健医療と連携を図りながら、生活の安定を図る。これが最も基本的な介護に関する政府の政策の方針ですね。

社会福祉法第3条、第5条にこれが書いてあります。

そして、介護実践は質のよいものでなければなりません。これは日本介護福祉士会の倫理綱領にも書いてあります。良質、質がよいとは何か？ これは計画によって表現されます。先ほどコミュニケーションの話が出ましたが、どんな順序でどんな話し合いをして、それをどのように表現して論理的に組み立てていくかということを示すのが介護過程です。ですから、介護過程をおろそかにして質のよい介護はできません。こういうふうに考えられるわけです。それはさまざまな問題を含んでいますので、これから順を追って話していきたいと思います。

**── ではここで、介護過程の科学性についてお願いします。**

先ほど、シンポジウムの中で介護の質を問われたときのことをお話ししました。そのとき、私はカンファレンスを省略すべきではないということを申し上げました。その場で即答しましたが、冷静になって考えてみると、介護過程をきちんと行うということですね。そして科学性ということなんですが、介護福祉は人間科学としての専門性を主張している

からなんです。つまり人間科学というサイエンスは、人間をサイエンスする。それが専門というものであると。

一方で自然を扱うのが自然科学です。医療、物理学、天文学などみんなそうです。介護の場合は人間社会を科学化するという。それは何ですか？ ということを前回やりました。もう一回項目立てていいますと、中村雄二郎[*10]先生が、「科学というのは普遍性、論理性、客観性を有することである」と主張して多くの賛同者を得ていますが、私もそれに賛成です。介護福祉士もその科学的要件を備えるように考えなければならない。

そうするとその要件は介護過程によって示すということになります。断片的ではなくてその話の中で基本的なことだけちょっとお話しします。

まず普遍性です。普遍性というのは、だれにとっても、どこでも、いつでも共通の考えがあるということです。北海道に行っても、沖縄に行っても、どこに行っても同じ考えが通用するということです。

そこで、介護の基本は何であるかと問われれば、「人間の尊厳とそこから流れ出る幸せを追求する」ということ。それから「主体性という自己決定を尊重する」ということ。「健康で文化的な生活を保障する」ということ。「実践活動が十分に行われる」ということ、これはどこに行っても通用します。人間の尊厳とか幸福追求について、どうでもいいという人はまずいません。世界の歴史から見てもそうです。

ちょっと脱線しますが、前回、ルネッサンス期におけるヒューマニズムについて説明をしました。人間中心主義です。それが人間の尊厳の源流となって流れ出ているのが今日であると。皆さんは覚えていますか？

国連がそれに関連した機関を持っています。一つはWHOです。もう一つはユネスコという機関です。ユネスコが人間科学という研究班をつくりました。ピアジェ[*11]という人が序文を書いてそれが『人間科学序説』という本になっています。私もそれを読んでみました。そのときに、同じユネスコの中で、ルネ・マウ[*12]という人がこう話しています。「人間科学はヒューマニズムということを基盤において研究すべきである」と訳者のあとがきで紹介されていました。

ヒューマニズムとは、「その人」を大事に、その人を中心にものを考えていくということです。中世におけるキリストを中心に考えた社会から、人間そのものを中心に置いた社会構造に変わったというのがルネッサンスであり、ヒューマニズムなんです。

人間科学もそうです。ヒューマニズムというものが人間科学ということになれば、介護過程における普遍性は、人間の尊厳、幸福追求、自己決定の尊重、健康で文化的な生活である。この言葉は、人間の本質を最もよく表現しています。このことを違うという人は日本でも、世界でもいないはずです。

だから普遍的なのです。それをベースにしたものが介護過程だから、介護過程は人間科学としての本質を備えているのです。これが一番目です。

二番目は、論理性です。ロジカルであるという言葉についてです。このお手本は、医療

モデルです。お医者さんの診断プロセスは非常に論理的です。無駄がありません。お医者さんが問診をする検査をする、結果を示す、相手の了解を得て治療計画を立てる、治療した結果を評価する、これは極めて論理的です。

介護過程の基本はこのロジックを使っています。いきなりアセスメントから始まるのではありません。お医者さんの問診があるように、介護過程というものにおいては、出会いがあります。出会いがあり、人間関係が形成される。そこからお互いに話し合って、生活課題を設定し、目標をつくり、実践計画をつくります。だから介護過程というのは極めて論理性を持っている。つまり科学性を持っている。そのお手本は医療モデルです。お医者さんが診断結果を出して治療を行うモデルを援用している。

ここで新たに考えることが出てきたのは、ICFの存在です。これはあとで話をします。ロジックがあるということに相違はありません。

三番目は、客観性です。これは、相互に確かめようということです。確かめ合ってゴールに達したものは、妥当なもの、正しいもの、適切なものということです。ちょっと難しくなりますが、コレクトアンサー(正しい答え)を求めているものではないんです。数学じゃないから。つまり答えが一つということを求めている世界ではない。ソリューションなんです。

ソリューションとは「解決する」ということです。どういう方法で解決したらよいのかというと、どんな目的があり、方法がよいのかということを、話し合うことです。ですからそのことを客観化すると言うのです。

哲学の話になりますが、介護福祉士の皆さん、将来余裕があったらぜひ哲学の勉強をしてほしいと思います。エドムント・フッサール[*13]という人がこういう主旨の考え方を言っています。「私がこう思う」というのは主観であり、それが共同化されて客観化する。一方自然科学の世界では主観ではないと言われています。自然科学の場合はデータが重要である、となるわけです。ところが人間科学の場合は、「私とあなた」という関係でお互いが話し合って、よい解決法を見つけていきましょうとなる。そのことが、いわゆる客観的だというわけです。

看護学、社会学、心理学などさまざまな場面で、フッサールのこの現象学が応用されています。今の話を応用した学問がたくさんあります。

話は脱線しますが、看護の世界には非常に優れた看護師さんがたくさんいらっしゃいますね。特にアメリカあたりの看護の本を読んでみますと、まことに尊敬すべき文章がたくさん出てきます。今述べたエドモント・フッサールの説を応用した本があります。何十年も看護師さんは頑張って、そのような専門書をつくってきたんです。で、介護福祉士はまだその歴史が30年ですよね。これからですけれども、その出発点を日本介護福祉士会はやろうとしていると私は思っているんです。そのためには正しいというより、より適切なよりよい方向性を見つけよう。ベターな方向性を見つけよう。というような学問体系になっているわけです。それは皆さんで確かめ合ったことをベースにするから、客観性がある。

それは主観の共同化。主観が集まって共同化すれば客観化すると。こういうふうに考える学問がありまして、19、20世紀にかけてですが、これを私は介護の専門性に援用するべきだと考えています。それが科学性です。

ですからそうなると、医学や物理学には普遍性・論理性・科学性という共通のベースがある。考え方、方法が違うだけで、介護福祉も同じベースに基づいている。説明のしかたが人間と自然の違いがあるだけだと。こういうふうに介護福祉士の皆さんは思ったらいかがですかと私は提案するわけです。

よく考えてください。介護福祉士は家族や本人とよく話し合うでしょう？ そしてアセスメントはお医者さんや看護師さん、ケアマネジャーや家族の人と話し合うでしょう？ そして出来上がったケアプラン案はカンファレンスで決定するでしょう？ カンファレンスはいろいろな人が話し合うじゃないですか。決定したものは実践計画として、実践、モニタリング、評価するでしょう。適切でないところがあったら、もう一回差し戻すでしょう？

これは自然科学の実験結果も同じです。いろんなデータをインプットしてやってみた結果、うまくいかないときは元に戻す。そして何回やっても同じ再生結果が出れば、それは実験結果が正しいとなるのが自然科学です。そして人間科学である介護過程も、やってみて、モニタリング、評価してみて、満足がいかなければもう一度アセスメントするか最初の家族との話し合いに戻してみて、やってみようという理論なんですよ。つまりきわめて科学的です。科学性を最もよく表現しているのが、介護過程です。

だから、おろそかにしてはいけない。ケアマネジャーがするとかしないとかを考える必要はありません。学問として、介護福祉士は介護過程の勉強をきちんとしてほしいと思います。

**⊙ 引用・参考文献**

＊10 科学性を示す要素について
『臨床の知とは何か』中村雄二郎著（岩波書店：1992年）：特に6-7ページ
＊11 人間科学の登場について
『人間科学序説』ジャン・ピアジェ著・波多野完訳（岩波書店：2000年）：特に主体性について128-129ページ、148ページ
＊12 同上
特にヒューマニズムについて192-193ページ
＊13 主観が人間共同体として存在することの妥当性について
『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』エドムント・フッサール著・細谷恒夫、木田元訳（中央公論社：1974年）特に230-231ページ